

第2部 トルコの都市下層民と社会意識 第4章 調査地区における移動の実態

著者	加納 弘勝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	402
雑誌名	トルコの都市と社会意識
ページ	176-195
発行年	1990
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00013637

第4章

調査地区における移動の実態

第1節 調査地区住民の流出地域

12地区の流入者の流出地域は、次のようになる。

(イ) アンカラのチャルスカンラル地区では、東部地域（地区区分については、第1部第3章参照）からの流入は31%と多い。しかし、東南部地域や地中海地域からの流入者はない。中央アナトリア地域内の移動者と州出身者（州内移動を含む）の合計（以下では域内移動と州出身者）が55%である。このうち非移動者は12%であり、域内・州内移動者の比率（域内移動と州出身者から非移動者を除いた比率）は43%である。残り14%がトルコの他の地域から州を越えた、域外からの州間移動ある（第Ⅱ-5表参照）。

1980年の調査では移動者210人のうち、東部地域からの流入者比率は9.0%となり、中央アナトリア地域内の移動者は60.5%であり、非移動者は16.0%であった⁽¹⁾。チャルスカンラル地区の方が80年の調査4地区（合計）よりも東部地域からの流入者が多い。調査地ではなくて、アンカラ全体では85.8%が非移動者かあるいは州内移動者であり、州間移動者は13.3%である。流入地域をみれば、東部地域1.9%、東南部地域0.5%、黒海地域3.8%などである⁽²⁾。チャルスカンラル地区では東部地域からの流入者が多く、逆に黒海地域からの流入者は少ないことが明確である（第Ⅱ-5表参照）。

(ロ) 地方大都市のガジアンテップの中心地区では、東部地域からの流入と東南部地域からの流入はともに 8% であり、それにガジアンテップの位置する地中海地域からの流入者は 5% である。また、域内移動と州出身者は 78% であり、このうち非移動者は 5% であるから、域内・州内移動者は 73% と著しく多い。域内・州内移動者の大半は、農村地域からの流入者（地区住民の 75% が農村流入者）である。このようにガジアンテップの中心地区には、多くの州内移動者が流入している。

ガジアンテップの郊外地区では、東部地域からの流入者はいない。東南部地域からの流入者比率は 10% であり、それにガジアンテップの位置する地中海地域からの流入者比率は 33% と著しく多い。域内移動者と州出身者の比率は 53% であるが、非移動者は 3% なので、50% が域内・州内移動者である。その大半が農村出身者（地区住民の 87%）である。

郊外地区では、中心地区に比較してガジアンテップの位置する地中海地域からの流入者が極めて多く、逆に、州内移動者が少ない。

ガジアンテップ全体では、非移動者と州内移動者の比率が 92.5% であり、州間移動者の比率が 6.8% である。ガジアンテップの流入地域をみれば、東部地域は 0.8%、東南部地域は 2.1% と最も多く、地中海地域は 1.9% である。これに比較すれば、中心地区でも郊外地区でも東部地域や東南部地域、それに地中海地域からなどの州間移動者が多い。

(ハ) 中大都市メルシンの 3 地区は、東部地域からの流入者比率は 10% ～ 23% とガジアンテップの 2 地区よりも多い。東南部地域からの流入者比率は、準中心地区シテラル地区と郊外（農村風）地区セルジュク地区では 7% ～ 14% とガジアンテップの 2 地区とほぼ等しい。しかし、西部の郊外地区デミルタシュ地区では東南部地域からの流入者比率が 57% と著しく高く、この地域から集中的に流入してきたといえよう。また、メルシンの位置する地中海地域からの流入者比率も、前 2 地区では 11 ～ 20% と東部地域からの流入者比率とほぼ同じ水準であるけれども、デミルタシュ地区では地中海地域からの流入者はみられず、この地区が前 2 地区とは別の流入者からなること

を示す。

メルシンの全ての地区で、域内移動者と州出身者の比率は14～33%であり、非移動者は0～6%であるので、上記のように算出すると、域内・州内移動者の比率も二つの郊外地区で11%であり、準中心地区で33%となる。新興工業都市メルシンにおいては、アンカラやガジアンテップに比較して域内・州内流入者比率は著しく低い。新興工業都市メルシンにはそれだけ域外からの州間移動者が多いのである。

(ニ) 中都市トラブゾンの3地区では、東部地域、東南部地域、地中海地域からの流入者はいない。例外として、富裕なエセンテッペ地区に東部地区からの流入者が6%いるに限られる。「停滞的な中都市」には、地域間移動によって東部地域などから流入する人はいない。第I部第4章でみたような、東部と東南部地域から黒海地域への移動は、この3地区には存在しない。域内移動者と州出身者の比率は二つの中心地区で63%と66%、郊外地区バフチェジック地区で83%であり、前記のように算出すると、域内・州内移動者が中心地区で40%、55%、郊外バフチェジック地区で69%となる。二つの中心地区には郊外地域に比較して、域内・州内移動者が少なく、非移動者比率を考案しても、東部地域、東南部地域、地中海地域以外（すなわち、その多くが黒海地域）からの州間移動者が多い（37%、28%、郊外地区は17%）。

(ホ) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では、東部地域からの流入者が2%と少なく、東南部地域や地中海地域からの流入者はいない。中央アナトリア地域の小都市にはこれらの地域からの流入者がほとんど存在しない。域内州内移動者と州出身者の比率は82%であり、非移動者が44%いるので、算出すると州内移動者が38%となる。域外からの州間移動者は16%である。

(ヘ) 地方町ビュンヤンの2地区では、東部、東南部、地中海地域からの流入者はいない。また、域内移動者と州出身者の比率は二つの地区とも96%である。中心地区では非移動者が72%であるから算出すると域内・州内移動者は24%と少なく、郊外地区では非移動者が52%であり算出すると44%

が域内・州内移動者となる。域外からの州間移動者はともに4%である。

地方町ビュンヤンでは、中都市トラブゾンと同様に、中心地区では郊外地区よりも域内・州内移動者が少ない(24%, 郊外地区44%)。というのも、域外からの州間移動者には二つの地区に相違がなく(ともに4%), ビュンヤンの中心地区では、郊外地区よりも非移動者が多いためである(72%, 52%)。他方、トラブゾンの中心地区でも、郊外地区よりも域内・州内移動者が少ない(40%, 55%, 郊外地区69%)。というのも域外からの州間移動者が多く中心地区に流入するからである(34%, 37%, 郊外地区17%)。これに対して、中大都市メルシンや地方大都市ガジアンテップの中心地区では、郊外地区よりも域内州内移動者が圧倒的に多く、域外からの州間移動者の多くは中心地区ではなくて郊外地区に流入する。

第2節 都市内における移動

1. アンカラにおける都市内移動

流入者が都市内部においてどのように移動するのかを検討する。1985年に実施した調査(アンカラ、ガジアンテップ)では、都市内部において何回移動したのかを聞いたにとどまり、86年に実施した調査(他4都市)では移動した地区など詳しく聞いた。ただし、アンカラに関しては81年にほぼ同様な調査を実施しており、都市内の移動に関してそのデータを利用する。

首都アンカラでは、調査地区であるチャルスカンラル地区における移動者(75名中68名、ケレシュ・加納の1985年の調査データによる)がアンカラに流入した時期については、1920年代は27.9%, 30年から第二次世界大戦前(以下、45年までと略)まで33.9%, 50年代は32.4%, 60年代は2.9%である。すでにみたように、52年に成立したチャルスカンラル地区は、65年に地区の人口は8700人となり、70年に1万5800人に増加した⁽³⁾。居住者は50年

代までにほとんどがアンカラに流入し、人口が急増した 65～70 年には 44.9% が流入していた。

市内での移動回数をみれば、多数が調査地（チャルスカンラル地区）に直接流入したわけではなかった。最初からこの地区に流入した移動無しの者は 33.8% である。最初是他地区に流入し、後にこの地区に流入した市内 1 回移動者は 22.1%，2 回移動者が 10.3%，3 回以上の移動者は 30.9% となる。市内における移動はかなり頻繁であるといえよう。また、アンカラ生まれである非移動者では、この地区で生まれた移動無しの者が 55.6% となり、市内 1 回移動者 11.1%，3 回以上の移動者は 31.3% となり、移動無しの者の比率が半数を超える。

1985 年の調査では具体的な市内移動を聞いていないので、81 年のアンカラ調査による。81 年の調査では、調査対象地として 4 地区をとったけれども、聞き取りデータの正確さの点からチャンカヤ大行政区に位置するアンカラ南西部のフザル地区、またアルトゥンダー大行政区に位置しアンカラ北端部の 23 ニッサン地区（以下ニッサン地区に略）における市内移動をみる。

アンカラの南西部に位置するフザル地区（地図番号 6，第Ⅱ-3 図参照）は、1970 年からこの地区のブドウ畑に人々が住み始め、70 年代末には完全に不法占拠地区に転じ、80 年にとなりのアタ地区から独立した⁽⁴⁾。85 年の居住人口は 5500 人であり、斜面の多い地域に 1～2 階建ての住宅が並び、遠くに高級地区の高層住宅がみえる。地域内部の主要道路は舗装され、アンカラの中心地クズライ行きのバスも走っている。赤色のスレート瓦でできた屋根には煙突があって、トルコの地方都市といった感じの地区である。

他方、アンカラの北端に位置するニッサン地区（地図番号 1）は、1965 年以降、人々が空き地に居住し始めて急激に人口の増加した、新しい不法占拠地区である。この地域の家は、木材やあるいは樹木、ときには石垣で囲まれた庭を有する家であり、住宅の面積はフザル地区よりも広く、しかも住宅は計画的に建られたためか整然と並ぶ。地域内部の主要道路は舗装され、この地域に至る主要道路も完全に舗装されている。80 年以前に、隣のアクタッペ地

区から独立した。85年の居住人口は3300人である。ニッサン地区は、アンカラの中心地区からはかなり離れた、郊外の農村といった感じの地区である。遠くて交通の便が悪いことを除けば、この地区の居住環境は良いといえよう。

地区の平均収入をみれば、フザル地区は1万5900リラ（1981年）と低いのに対して、ニッサン地区では2万3300リラ（1981年）と高い。

2. アンカラ市内における移動の軌跡

南西部のフザル地区の居住者（50人のうち28人判明）が最初に流入した地域は、中央大行政区が少なく（3.5%）、中心地クズライを中心にフザル地区と反対側に位置する北東部のアルトゥンダー大行政区（21.4%）も多くない。西部のイエニ・マハッレ大行政区（3.6%）やその他不明地域（7.1%）も少なく、フザル地区の存在するチャンカヤ大行政区（53.6%）に、ほぼ半数が集中する⁽⁵⁾。

フザル地区に移動者の50.0%が直接流入し、市内1回移動者は35.8%（2回目の地区移動者50.0%、14人から3回目の地区移動者14.2%、4人を引いたもの）であり、市内2回以上の移動者は14.2%である。流入者のうち最初の流入地区に1年しか滞在しない人は21.4%（6人）、2～3年滞する人は25.0%（7人）となる。こうして流入後1～3年で最初の流入地区からの流出者は46.4%とほぼ半数を占める。4～5年で流出者は21.4%、6～10年で流出者は17.9%、10年以上滞する人は10.7%と減少する。

北端の豊かなニッサン地区の居住者（50人のうち42人判明）が最初に流入した地域は、中央大行政区が少なく（4.8%）、ニッサン地区が含まれる北東部のアルトゥンダー大行政区に半分強が流入した（54.8%）。これに対して、西部のイエニ・マハッレ大行政区に最初に流入した人はなく、南部のチャンカヤ大行政区に28.6%が流入した。アンカラの北端に位置するニッサン地区では、北東部アルトゥンダー大行政区に流入する比率（54.8%）は、フザル

地区居住者が南のチャンカヤ大行政区 (53.6%) に流入する比率とほぼ等しい。また、ニッサン地区に移動者の 48.6% が直接に流入し、市内 1 回移動者は 35.2% であり (2 回目の地区移動者 51.4% から 3 回目地区に移動者 16.2% を引く)、市内 2 回以上の移動者は 16.2% である。フザル地区における市内移動比率 (14.2%) とほぼ同じである。

ニッサン地区への流入者のうち最初の流入地に 1 年未満しか滞在しない人は 9.5% であり、2～3 年滞在する人は 33.3% である。結局、流入後 1～3 年で最初の流入地から流出する人は 42.8% であり、フザル地区と同程度かやや少ない (46.4%)。4～5 年で流出する人は 16.7%、6～9 年で流出する人は 11.9% となり、フザル地区よりも少ない。逆に、ニッサン地区の居住者では最初の流入地に 10 年以上留まった人は 19.0% いて、フザル地区の居住者 (10.7%) よりも多い。

第 3 節 地方都市における移動

(イ) アンカラにおける移動はすでに述べたとおりである。

(ロ) 地方大都市ガジアンテップでは、中心地区における流入者 (40 人中 38 人) には、ガジアンテップへ 1920 年代に流入した人 (38.0%) と 50 年代に流入した人 (44.7%) の二つの型が認められる。60 年代の流入者はわずかに 2.6% である (1985 年調査による)。

これに対して、郊外地区では流入者 (30 人中 29 人) のうち、中心地区と異なって郊外地区の居住者は、1920 年代 (10.3%) ではなく、30～45 年の時期 (48.3%) と 50 年代 (37.9%) にガジアンテップに流入した人が多く、とくに 30～45 年の時期に流入した人が多い。

市内での移動回数をみれば、中心地区に直接流入した人は 15.8%、市内 1 回移動者は 21.1%、2 回移動者は 15.8%、3 回以上の移動者は 42.1% となる。中心地区では直接流入する (15.8%) よりも、間接的に流入してく

る人が多く、とくに郊外地区と比較して、市内1回移動者(21.1%)と3回以上の移動者(42.1%)が多い。これに対して郊外地区では、直接流入した人が圧倒的に多く(55.2%),逆に1回移動者は少なく(3.4%),3回以上の移動者も多いけれども(27.6%),中心地区ほど多くはない。また、ガジアンテップ生まれの非移動者では、中心地区で生まれた移動無しの人は50%であり、郊外地区で生まれた移動無しの人は100%となる(ただし1人)。

(ハ) 新興工業都市メルシンでは、メルシンへの流入時期をみれば、郊外(農村風)地区セルジューク地区では流入者のうち(35名のうち33名)、1920年代にメルシンに流入した人はいない。45年までに流入した人が最も多い(51.5%, 50年代33.3%, 60年代12.1%)。セルジューク地区への移動時期をみれば、45年まで、あるいは50年代の流入した人は少なく(3.0%, 6.0%), 60年代に流入した人が最も多い(48.5%, 70年代24.2%, 84年まで18.2%)。60年代にセルジューク地区住民の半分が居住し始めた。メルシン市内での移動回数をみれば、非移動者(2人)は3回以上の市内移動を経験した。また、セルジューク地区に直接流入した移動者は24.2%, 市内1回移動者が27.3%, 2回移動者が24.1%, 3回以上の移動者が24.1%と、それぞれ4分の1に分れる。

準中心地区シテラル地区では全員が流入者であり、メルシンへの流入時期をみれば、1945年までと50年代、とくに50年代が最も多い(36.7%, 46.7%, 60年代13.3%)。シテラル地区への流入時をみれば、50年代と60年代には少なく(6.7%, 16.7%), 70年代が最も多い(46.7%, 84年まで20.0%)。住民のほぼ半分が70年代に流入したのである。市内での移動回数をみれば、メルシン市内において直接シテラル地区に流入した移動者は30.0%, 市内1回移動者は36.7%, 2回移動者は10.0%, 3回以上の移動者は23.3%となる。セルジューク地区や東南部からの移動者の多いデミルタシュ地区(後述)に比較して、準中心地区シテラル地区へは直接流入者と市内1回移動者が多い(合計66.7%, セルジューク地区51.5%, デミルタシュ地区38.2%)。

東南部からの流入者の多かった郊外地区デミルタシュ地区でもほとんどが流入者であり（35名のうち34名）、メルシンへの流入時期をみれば、1945年までと50年代、とくに50年代が多い（45年まで32.4％、50年代55.9％、60年代5.9％）。3地区の中でも50年代にメルシンに流入した人の比率が最も高い。45年までや、とくに60年代に流入した人の比率は最も低い。しかも、デミルタシュ地区への流入時期をみれば、70年代が最も多く、過半数を占める（58.8％、50年代17.6％、60年代11.8％）。

市内での移動回数をみれば、メルシン市内において直接デミルタシュ地区に流入した移動者は20.6％、市内1回移動者は17.6％、2回移動者23.5％、3回以上の移動者は26.5％である（11.8％不明）。クルド人の多い東南部地域からの流入者が多いため、出身地域との結び付きが強いと考えられるけれども、直接流入した人の比率はメルシンの他2地区に比較してやや少ないほどである。

三つの地区において移動者が新興工業都市メルシンに流入した時期をみれば、セルジュク地区の居住者が最も早くて、第二次世界大戦の終わりまで（1945年まで）の流入者比率が51.5％を占める。シテラル地区とデミルタシュ地区、とくに、デミルタシュ地区では、セルジュク地区より遅れて50年代にメルシンに流入した人が多い。そして、それぞれの地区への流入時期をみれば、セルジュク地区への流入よりもシテラル地区、デミルタシュ地区への流入が遅く、なかでも、デミルタシュ地区では70年代の流入に集中した。

(二) 中都市トラブゾンでは、トラブゾンへの流入時期をみれば、中心地区ザファール地区においては1950年代に多い（45.8％、60年代12.5％）。ただし、メルシンの各地区に比較して20年代に多く、45年までには少ない（12.5％、29.2％）。20年代までの流入者比率（12.5％）は、トラブゾンの富裕な中心地区エセンテッベ地区のさらに高い16.1％、郊外（農村風）地区バフチェジック地区10.0％と同様に、同比率が0％～5.9％である新興工業都市のメルシンよりは高い。しかし、同比率が38.2％である伝統的大工業の都市ガジアンテップの中心地区（郊外地区は10.3％）よりは低い。

市内移動の時期をみれば、ザファール地区に流入した非移動者では1920年代16.7%，45年まで16.7%，50年代50.0％である。50年代に半数がザファール地区に住み始めたが、20年代に住み始めた人も相対的に多い。また、移動者ではこの地区に20年代に流入した移動者はなく、45年までに流入した移動者も4.2％と少ない。70年代が最も多いけれども、各年代とも均等にザファール地区に流入した（70年代37.5％、ただし、50年代20.8％、60年代16.7％、80年代16.7％）。中心地区のザファール地区でも住民の半分強が、70年代、あるいは80～84年に流入した最近の流入者である。

市内での移動回数をみれば、非移動者（6名）のうちザファール地区生まれは66.7％、市内1回移動の非移動者は33.3％である。また、移動者では、ザファール地区への直接流入者は45.8％を占め、市内1回移動者などを上回る（25.0％、2回移動者4.2％、3回以上の移動者は20.3％）。ただし、トラブゾンの他2区では直接流入者の比率は、エセンテッペ地区で29.0％、パフチェジック地区で23.3％であり、メルシンにおける同比率21～30％にはほぼ類似した水準である。中心地区ザファール地区に限って、直接流入者が過半数を占めるほど多い。

豊かな中心地区エセンテッペ地区では、トラブゾンへの流入時期をみれば、1945年までの流入者が最も多い（38.7％）。ザファール地区と比較すれば、45年までの流入者だけでなく20年代の流入者や70年代の流入者も多いが（16.1％、12.5％）、60年代の流入者は少ない（16.1％）。次に、エセンテッペ地区への流入時期をみれば、45年までに流入した非移動者は25.0％、50年代が75.0％となる。また、移動者では、45年までにエセンテッペ地区に流入した移動者は6.5％と少なく、60年代が最も多い（35.5％、50年代25.8％、70年代22.6％、84年まで9.7％）。しかし、70年代、あるいは、84年までの流入者は減り、豊かな中心地区エセンテッペ地区の住民はザファール地区住民よりも前に多くがトラブゾンへ流入し、エセンテッペ地区への流入時もザファール地区の住民の流入時よりも古いといえよう。

市内での移動回数をみれば、非移動者のうち豊かな中心地区エセンテッペ

地区生まれは66.7%, 市内1回移動者は33.3%である(非移動者4人, うち不明1人)。また, エセンテッペ地区に直接流入者は29.0%であるのに対して, 3回以上の移動者は著しく高い(41.9%, 市内1回移動者16.1%, 2回移動者9.7%)。豊かな中心地区エセンテッペ地区では, バフチェジック地区(40.0%, 後述)と同様に, ザファール地区に比較して市内3回以上移動者が多い。

郊外のパフチェジック地区では, 非移動者(5人)のうちバフチェジック地区生まれ(非移動者)は60.0%であり, この60.0%は近郊農村が都市化によって都市に含まれ, その結果, 住民は非移動者になったケースである。ただし, 市内3回以上の移動者もトラブゾン非移動者のうち40.0%を占める。他方, トラブゾンへの非移動者の流入時期をみれば, 1945年までの流入者と50年代の流入者が大半を占め(46.7%, 43.3%), 他の2地区に比較してこの時期の流入者への集中度が高いし, 45年までの流入者が多い。バフチェジック地区への流入の時期をみれば, 非移動者では45年までに25.0%, 50年代に75.0%である。また, 移動者では70年代に著しく集中している(53.3%, 50年代16.7%, 60年代20.0%, 84年まで10.0%)。教育施設がよく整ったこの郊外地区に住民は60年代から集まり始め, 70年代に集中的に居住した。バフチェジック地区は, 相対的に早くから(45年まで, ただし20年代は少ない)トラブゾンに流入した住民が, 主に70年代にこの地区へ流入したといえよう。

市内での移動回数をみれば(非移動者は上述), バフチェジック地区への直接流入者はほぼ4分の1であり(23.3%), エセンテッペ地区とはほぼ同じ比率であり, 直接流入者の多かったザファール地区(45.8%)とは異なる。また, バフチェジック地区では3回以上の市内移動者は多く(40.0%, 1回移動者は13.3%, 2回移動者23.3%), この点でもエセンテッペ地区に似ている。

(※) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では, 非移動者のうち350エブレル地区生まれは9.1%に限られる。

移動者では, ネブシェヒルに流入した時期は1945年までの流入者と50年

代の流入者が多い(35.7%, 39.3%)。350 エブレル地区の住民の75.0%は50年代までに流入したのである。また、350 エブレル地区への流入時期をみれば、非移動者では45年までが圧倒的に多い(68.2%, 20年代4.5%, 50年代22.7%, 70年代4.5%)。45年までに350 エブレル地区に住み始めた人が4分の3を占める。移動者をみれば、45年までの流入者は少なく(3.6%), 60年代と70年代が多い(32.1%, 25.0%, 50年代17.9%)。84年までも比較的多い(17.9%)。この84年までの流入者比率は、停滞的都市トラブゾン(平均14.2%, 3地区は9.7%~16.7%), さらには新興工業都市メルシン(平均16.7%, 3地区は11.8%~24.2%)よりも多いほどである。

ネブシェヒルでの市内移動をみれば、非移動者ではこの地区生まれで市内移動なしの人はすでに述べたように9.1%であり、市内3回以上の移動が最も多い(59.1%, 1回移動27.3%, 2回移動4.5%)。このように、ネブシェヒル生まれも約9割が市内を移動し、とくに6割は3回以上移動している。また、移動者では、350 エブレル地区に直接流入した移動者は21.4%であり、市内1回移動が最も多い(46.4%, 2回移動は3.6%, 3回以上の移動は25.0%)。流入者では1回移動をして350 エブレル地区に流入するケースが最も多く、非移動者のように3回以上の移動者が最も多くはならない。

(c) 地方町ビュンヤンの中心地区では非移動者は72.0%であり、移動者はわずかに28.0%に限られる。非移動者では、この地区生まれで移動なしの人が16.7%であり、市内1回移動者が圧倒的に多い(55.6%, 2回移動者5.6%, 3回以上の移動者22.2%)。非移動者のうち中心地区への移動の時期は1920年代と45年までが多く(ともに38.8%, 38.8%), 50年代や60年代は少なく、順に減少している(16.6%, 5.6%)。45年までに非移動者の4分の3は居住を開始したのである。

中心地区において、移動者のビュンヤンへの流入時期をみれば、1920年代と50年代が多く(ともに42.9%, 42.9%, 45年まで14.2%), 地方町における中心地区の居住者は早くからこの町に流入していた。中心地区への流入時期をみれば、20年代はいないし、45年までも少なく(14.3%), 50年代と84

年までがやや多い (28.5%)。このように流入者は地方町の中心地区へ 50 年代以降に住み始め、とくに 80 年代前半にも流入している。市内移動をみれば (非移動者については上述)、直接に中心地区への流入した移動者は 14.2% であり、大半は市内 1 回移動と 3 回以上の移動である (それぞれ 42.9%, 42.9%)。

ビュンヤンの郊外地区では非移動者が 52.0% であり、移動者が 48.0% である。非移動者では、この地区生まれで移動無しの人が 30.8%, 市内 1 回移動者が半数を超す (53.8%, 3 回以上の移動者は 15.4%)。中心地区と比較して、郊外地区ではこの地区生まれで移動していない人が多い。ただし、市内 1 回移動者は同じほどである。郊外地区への移動時期をみれば、1920 年代は少なく (15.4%), 45 年までや 50 年代が多い (46.2%, 30.8%)。中心地区の非移動者に比較して 20 年代に居住していた人も少なく、また、60 年代にこの地区にビュンヤン生まれが流入したことも少ない (7.7%)。逆に、45 年までと 50 年代に中心地区の住民よりも郊外地区の住民の多くはほとんどここに居住し始めた。

郊外地区において、移動者のビュンヤンへの流入時期をみれば、1920 年代に流入した移動者が多く (33.3%), 45 年までに流入した移動者も半分と多い (50.0%, 50 年代 8.3%, 60 年代 8.3%)。20 年代に流入した移動者は中心地区よりも少ないけれども、郊外地区でも 20 年代と 45 年までにビュンヤンに流入した人が半分を占め、新しいビュンヤン流入者は限られている。郊外地区への移動の時期をみれば、45 年までにこの地区に居住を開始した人はいないで、50 年代と 60 年代に集中する (33.3%, 41.7%)。70 年代や 84 年までは少なく、しかも減少している (16.7%, 8.3%)。中心地区の移動者と比較すると、郊外地区への移入は 45 年代までではなく、50 年代とくに、60 年代に多い。70 年代は同じであり、逆に 84 年までの流入者は少なくなった。地方町の富かな郊外地区へ流入は、とくに 60 年代に集中し、最近では郊外の裕福な地区ではなくて貧しい中心地区に流入し始めたといえよう。

郊外地区における市内移動をみれば、移動者では、郊外地区への直接に流

入した移動者は多く (50.0%), 市内1回移動者も多い (33.3%), 3回以上の移動者は少ない (16.7%)。中心地区と比較して郊外地区では、直接に流入した人の比率が大いに高いという特徴がみられる。

第4節 都市内移動の軌跡, 86年調査対象都市

市内への流入地区を示すデータは, 1986年に実施したメルシン, トラブゾン, ネブシェヒル, ビュンヤンの4都市に限って存在する。また, アンカラの流入地区に関しては, 81年の調査データによって本章第2節で検討したとおりである。(イ)アンカラについては前述し, (ロ)ガジアンテップについては資料が存在しない。また, データの存在する4都市に関しては, 各都市市街図(第Ⅱ-5図から第Ⅱ-8図)をもとに, 最初の流入地区が現在の居住地区を以下の三つの地域に分けて, どの地域に流入したのかを検討する。a) 調査地区にほぼ接する地域, b) 都市の中心地域, c) 都市の郊外地域である。もちろん, 一応の分類であり十分には整合的な分類ではない。

(ハ) 新興中大工業都市, メルシンでは, 郊外(農村風)地区セルジュク地区(=12, 第Ⅱ-5図)において, 住民は次のような滞在地や最初の流入地から市内移動を経て, この地区に滞在するようになった。a) 非移動者の最初の滞在地はセルジュク地区の東に接するギュンドーグ地区(=5)であった(他1名は不明)。b) 農村出身者(地区調査者35人中24人)の最初の流入地区(不明を含め判明する人17人)は, 第1に, ケマル大通りより南の中心地区であるイエニ・マハッレ地区(=7)2人, イフサニエ地区(=17), 海岸に近いクレメトハーネ地区(=20), その北に接するバフチェ地区(=21)の地域であり, 5人29.4%である。第2に, ケマル大通りの北にありセルジュク地区に接する, ギュンドーグ地区(=5)2人, サールック地区(=11)であり, 3人17.6%である。第3に, それ以外の周辺地域, 北西の端のポルトカル地区(=26)であったし, 地図では確認できない23エブラル3人, 200エブラル2

人もこうした周辺地域とみなせば、周辺地域 6 人 35.3% と一番多い。c) 都市あるいは町の出身者が最初に流入した地域は（9 人中不明を含め判明するのは 8 人）、第 1 に、ケマル大通りの南に位置する中心地域、ヌスラティエ地区（= 10）、その西隣のイフサニエ地区（= 17）、海岸に近いキレメトハーネ地区（= 20）、バフチェ地区（= 21）であり、4 人 40.8% である。第 2 に、ケマル大通りの北に位置し、セルジュク地区に接した地域、サールック地区（= 11）、トズ・カプラン地区（= 13）、セルジュク地区（= 12）であり、3 人 28.6% である。第 3 に、周辺地域や不明は 1 人 14.3% である。都市あるいは町の出身者のほうが、共和国大通りの南の町の中心地域に多くが最初に流入したのである。

準中心地区シテラル地区では、a) 非移動者は存在しない。b) 農村出身者（19 人中判明するのは 13 人）は、第 1 に、共和国大通りの南に位置する中心地域、イエニ・マハッレ地区（= 7）3 人、バフチェ地区（= 21）2 人は、合計で 5 人 38.5% である。第 2 に、ケマル大通りの北に位置し、シテラル地区とこれに接した地域、シテラル地区（= 6）2 人、サールック地区（= 11）2 人、西部のギュンドーグ地区（= 5）、北部のイエニ・パザール地区（= 4、ただしシテラル地区と接している）であり、6 人 46.2% である。第 3 に、第 1、第 2 地域以外で周辺地域や不明地域は、デミルタシュ地区（= 25）と不明、2 人（15.4%）である。

c) 都市あるいは町出身者の流入した地区（11 人中 8 人判明）は、第 1 に、ケマル大通りの南に位置する中心地域、バフチェ地区（= 21）は 2 人 25.0% である。第 2 に、ケマル大通りの北に位置し、シテラル地区とこれに接する地域、シテラル地区（= 6）2 人、北部のイエニ・パザール地区（= 4）の 3 人 37.5% である。第 3 に、周辺地域や不明地域は、北西部のデミルタシュ地区（= 25）、西の端に近い共和国地区（= 32）、地図に対応しない 23 エブラル地区（= 40）37.5% である。シテラル地域では農村出身の方がケマル大通りの南に位置する中心地域に最初に流入した。

東南部地域からの流入者の多いデミルタシュ地区では、a) 非移動者（1

人)はデミルタシュ地区(=25)の出身者である。b)農村出身者(21人のうち20人判明)、第1に、ケマル大通りの南に位置する中心地域、バフチェ地区(=21)8人40.0%である。第2に、ケマル大通りの北に位置するデミルタシュ地区(=25)とこれに接する地域、デミルタシュ地区(=25)6人が直接流入し、北のポルトカル地区(=26)で計7人35.0%である。第3に、周辺地域や不明地域は、西部のシテラル地区(=6)、サルルック地区(=11)、不明のユンクテッペ地区(=41)3人15.0%である。これに対して、c)都市や町からの流入者(7人のうち5人判明)は、第1に、ケマル大通りの南に位置する中心地域、バフチェ地区(=21)2人、中心商業地メスディエ地区(=9)3人60%であり、第2、ケマル大通りの北に位置するデミルタシュ地区(=25)20%、第3に不明地区20.0%である。都市や町からの流入者は、農村からの流入者よりも中心地区に集中するといえよう。

(二) 中都市トラブゾンでは、中心地区ザフェール地区において、a)非移動者(6人のうち2人判明)は、第1に比較的近いイエニ・ジュマ地区(=24、第Ⅱ-6図参照)と、第2に比較的遠くて、都市の中心地区に近い港のイスケンデル・パシャ地区(=16)にそれぞれ50.0%ずつである。b)農村出身者(21人のうち11人)は、第1に、比較的近い地域、オルタ・ヒサル地区(=20)、バフチェジック地区(=1)、ドーアン地区(=8)、ギュルバハール・ハトン地区(=13)4人36.3%である。第2に比較的遠い地域、南部郊外のボズテッペ地区(=2)5人に流入し、南部中心地区エセンテッペ(=7)で計6人54.5%である。第3に、その他地域と地図で不明地域、ゼイトリック地区1人9.1%である。農村出身者では多くが南部の郊外地域に多く流入した。これに対して、c)都市と町の出身者(3人のうち2人)は、第1の比較的近い地域、ドーアン地区(=8)、第3のその他、不明地区イエニ・マハッレ地区にそれぞれ50.0%ずつ流入した。

豊かな中心地区エセンテッペ地区では、a)非移動者(1人)は中心地区である共和国地区(=3)の出身である。b)農村出身者(21人のうち13人)は、第1に、比較的近い地域、エセンテッペ地区(=7)に5人が直接流入し、港

に面したチョムレクジュ地区(=5) 2人, 計7人53.8%である。第2に, 比較的遠い地域, 南西のオルタ・ヒサル地区(=20), その先のドーアン地区(=8)に2人15.4%である。その他地域や地図との照合不能地域, ホヤル地区, ザオノス地区などに3人23.1%である。これに対して, c) 都市と町からの移動者(10人のうち8人判明)は, 第1に, 比較的近い地域, エセンテッベ地区(=7)に4人が直接に流入し, 港に面したチョムレクジュ地区(=5), さらに中心地区の共和国地区(=3)で合計75.0%である。第2に, 比較的遠い地域, イェニ・ジュマ地区(=24)に1人12.5%, 第3に, その他地域と不明地区, エルズルム・ジャッデ地区に1人12.5%である。都市と町からの移動者は, 農村出身者よりも近い地域や中心地域に流入している。

郊外(農村風)地区バフチェジック地区では, a) 非移動者(5人のうち2人判明)は, その他地域と不明地域2人100.0%である。b) 農村出身者(17人のうち11人判明)は, 第1に, 比較的近い地域, バフチェジック地区(=1) 6人, タバクハーン橋の近くのオルタ・ヒサル地区(=20), イェニ・ジュマ地区(=24), さらに南西のドーアン地区(=8)に各1人, 計9人81.2%と多い。第2に, 比較的遠い地域, 港に面したチョムレクジュ地区(=5)に1人9.1%である。第3に, その他地域と不明地域, ザオノス地区に1人9.1%である。これに対して, c) 都市と町の出身者(13人のうち11人判明)は, 第1に, 比較的近い地域, バフチェジック地区(=1) 8人72.7%と直接流入している。第2に, 比較的遠い地域, 港に面したチョムレクジュ地区(=5)とギュルバハール・ハトン地区(=13) 2人18.2%である。第3に, その他地域や不明地域, ファティア地区1人9.1%である。農村出身者の方が, 都市や町の出身者よりもわずかに多く, 第1の比較的近い地域に流入している。

(※) 小都市ネブシェヒルの350エブレル地区では, a) 非移動者(22人のうち19人判明)は, 第1に, ホクーマテ通りの北に位置し, 市・バスターミナルを含む北西部地域, カイセリ通りの西, ヘリクリ地区(=13, 第Ⅱ-7図参照)

に4人, その南カラソク地区 (= 10) に2人, ハッジ・ルスト地区 (= 34) に2人, 北西郊外のイェルミテミーズ地区 (= 29) 2人, 計10人, 52.6%と多い。第2に, 350 エブレレル地区に接するか近い北東部地域, イェニ・マハッレ地区 (= 3), 南のレイース・ベイ地区 (= 24) に2人10.5%である。第3に, 中心部地域, 旧市地区であるカヤ・ジャミ地区 (= 11) に2人, ホクーマテ通りに近いジャミ・ジャディード地区 (= 15) に2人で, 計4人, 21.1%である。第4に, 南部地域, エスキジ地区 (= 16) に1人5.7%であり, 第5に, その他地域や不明地区, 2人10.5%である。b) 農村出身者(21人のうち17人判明)は, 第1に, 北西部地域, カラソク地区 (= 10) に2人, イェルミテミーズ地区 (= 29) に1人, 計3人, 19.2%である。第2に, 北東部地域, イェニ・マハッレ地区 (= 3) に4人, その北のエメック地区 (= 2), 350 エブレレル地区 (= 1) に各1人, 計6人35.3%である。第3に, 中心部地域, ホクーマテ通りに近いカプジュバン地区 (= 5) とジャミ・ジャディード地区 (= 15) に, 2人11.8%である。第4に, 南部地域, トプラクルック地区 (= 14), 1人5.9%である。第5に, その他地域と不明地区は, ワーリ・コナー地区など5人29.4%である。これに対して, c) 都市や町の移動者(7人のうち5人判明)は, 第1に, 北西部のハッジ・ルスト地区 (= 34) に1人20.0%, 第2に, 北東部の, 350 エブレレル地区 (= 1) に1人20.0%, 第3に, 中心部地域, カヤ・ジャミ地区 (= 11) にも1人20.0%, 第4に, その他地域と不明地に, ワーリ・コナー地区に2名40.0%である。要約すると, 農村地域出身者は第2の北東部地域に比較的多くが流入してきたが, 都市や町出身者には北東部地域へ多くが流入したことはない。

(ハ) ビュンヤンの中心地区では, a) 非移動者(18人のうち17人判明)は, 第1に, 中心のデルビシュガー地区 (= 6, 第II-8図参照) の南西に位置する南西部地域, ジャミ・カビール地区 (= 2) に5人, その北のジャミ・ジャディード地区 (= 3) に3人, イブラヒム・ベイ地区 (= 4) に1人, 計9人, 52.9%とこの地区に多い。第2に, 中心部と南東部地域, デルビシュガー地区 (= 6) に3人, スメル地区に1人, 計4人23.5%である。第3に, 北部

地域は存在せず、第4に、その他地域や不明地域には、4人23.5%である。非移動者の多くが、第1の南西部地区の出身者である。b) 農村出身者(3人のうち3人判明)は、第2の中心地域、デルビシュガー地区(=6)に2人66.7%、第5のその他地域に1人33.3%である。これに対して、c) 都市と町の出身者(4人のうち3人判明)は、第1の、南西部地域、西のドーアングー地区(=9)に1人33.3%、第2の中心部と南部地域、スメル地区(=1)に1人33.3%、第3の北部地域、共和国地区(=7)に1人33.3%である。非移動者が第1の南西部地域に多いのに対して、移動者は南西部地域に多くはないのである。

また、郊外地区(サールック地区=5)では、c) 都市や町の出身者はいない。a) 非移動者(13人のうち9人判明)は、第1に、南西部地域、イブラヒム・ベイ地区(=4)に2人、ジャミ・カビール地区(=2)、西のドーアングー地区(=9)で、計4人44.4%である。第2に、中心部地域と南部地域、デルビシュガー地区(=6)に4人44.4%である。デルビシュガー地域の出身者が多い。また、b) 農村出身者(12人のうち7人判明)では、第1に、南西部地域には流入しなかった。第2に、中心部地域と南東部地域、デルビシュガー地区(=6)2人、スメル地区(=1)に各1人、計3人33.3%である。第3に、北東部地域のサールック地区(=5)、サールック地区の南のバイラム地区(=10)に各1人で、2人22.2%である。ビュンヤンの豊かな郊外地区では、非移動者は南西部に多く、これに対して農村出身者は北部地域や北部地域に近い中心部地域デルビシュガー地区に流入する。

[注]

- (1) 加納弘勝「アンカラのスラム」(『アジア経済』25巻4号 1984年4月) 49ページ、新津晃一編、前掲書、311ページ。
- (2) 調査データ、ケレシュ・加納によるアンカラ・ガジアンテップ調査(1985年)による。
- (3) 現地行政資料(市開発局の用意した資料で、約300の地区名と1965年から85年まで、5年ごとの住民数が記されている)。

- (4) 加納弘勝「アンカラのスラム」45～46 ページ。新津晃一編，前掲書，306 ページ。
- (5) 加納弘勝「アンカラのスラム」(1984 年) のもとになった 1980 年調査結果の再集計。